

## 5月3日・復活節第4主日 ヨハネ10章1～10節 わたしはもう来ているよ

今月の復活節第4主日から第6主日まで、ヨハネの福音が読まれます。いずれもイエスとわたしたちの関係が述べられます。復活の恵みが主の昇天・聖霊降臨へ向かって明らかにされていく過程であるといえるでしょう。

今日の福音では、イエスはご自分とわたしたちの関係を羊飼いと羊にたとえられます。「羊はその（羊飼いの）声を知っているので、ついて行く」とあります。これはこのあとの14節に出てくる「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」ということばにつながります。知る、というのは単に「羊という動物を知っている」という意味ではなく、「一匹一匹の羊をよく知っている」という意味です。

たとえば、私が学校の教室を訪ねたとき、「何年何組の生徒」だということは知っていても、ひとりひとりの名前や性格は知りません。けれども学校の担任の先生は、生徒をよく知っています。「この子は理解が遅いけれど学んだことは忘れない」とか「この子は勉強は苦手だけど友達にはやさしい」とか、よい先生はひとりひとりのことをよく知り考えて指導します。イエスが「よい羊飼い」であるとはそういうことなのです。

羊はみんな同じような姿をしていますが、よい羊飼いは見分けがつくそうです。羊飼いは昼も夜も羊とともに生活をしていますし、羊を自分のように大切にしています。だから、一匹の羊が迷ったときもすぐに気づいたわけです。

そして、羊も羊飼いを知っています。羊が夜休むために、各地に囲いが作られていたそうです。夜になるとたくさんの羊飼いが自分の羊を連れてやってきます。羊の群れはごちゃになって休みます。そして朝に出かけるときに羊飼いが声を出して呼ぶと、羊は間違えずに自分の飼い主の声を聞き分けてついていきます。羊飼いは羊をよい牧草地に先頭に立って連れて行くのです。

そのように、羊飼いであるイエスは羊であるわたしたちのことをいつも考え、命をかけて守ってくださいます。わたしたちも羊飼いであるイエスについていけば間違いないことを知っているのですが、ときどき迷ってしまうかもしれません。そんなときも、いえ、そんなときこそ羊飼いイエスが本領発揮されます。命を顧みずに探しに来てくださるのです。

今のわたしたちは先の見えない恐れと不安の中に過ごしています。迷ってしまった羊の気持ちです。だんだん暗くなってきて遠くで狼の遠吠えが聞こえてくる。まわりには誰もいない。そこへ遠くから呼ぶ声が聞こえてくる。間違いなく自分の羊飼いの声だ！羊はありったけの声を出して羊飼いを呼ぶでしょう。その喜びは計り知れないものです。

わたしの羊飼いイエスもわたしのところへ来てくださいます。わたしも声を張り上げて呼びましょう。「大丈夫、わたしはもう来ているよ。」  
(柳本神父)